脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.80

**Mr.S　ハンガリー**

脱施設化ガイドライン案への文書提出

（「ヴァリディティ財団」（Validity Foundation） 精神障害者アドボカシーセンターの支援による）

私は障害のある男性です。私は小さなグループホームでの1年半を含め6年間施設で生活してきました。

ガイドラインについて、以下のような意見を述べたいと思います。

**施設について：**

・　食事がまずかったら、バケツに入れて残飯置き場（slop）に置きます。そして自分たちで調理します。少なくとも週に3回は食事がまずいです。自炊のために自分たちのお金を使わなければなりません。

・　何でも報告しなければなりません。誰かに会ったら、その報告をしなければなりません。

・　施設はとても厳格です。地域で暮らす方がずっといいです。

・　一刻も早く、この馬鹿げた状況から脱却しなければなりません。

・　自分たちのポケットマネーからもっと質の良いトイレの香水や粉せっけんを買えば、発言権までくれます。施設からはひどいものしかもらえません。その洗剤では、きれいにならないのです。

**施設収容を防ぐこと**

・　後見当局が、父母は私をうまく育てられないと判断して、私を連れて行きました。家には服も食べ物もありませんでした。母はものごとの管理能力がないと言われました。彼女には後見人がいました。このため私は家族から引き離されたのです。母は私のためにたくさん戦ってくれました。他の2人の兄弟は養子に出されました。

**脱施設化と自立生活支援の方法に関して：**

・　もし施設を出るなら、職場に近く、公共交通機関で行けるアパートに住みたいです。

・　退所のための準備はしていません。

・　書類作成のサポートが必要です。後見人では解決できません。請求書の支払い、特に小切手での支払いを手伝ってくれる支援者がいると良いです。

・　引っ越したら、知り合いはいないけど、パートナーと二人きりで好きなことができます。誰も私たちの一挙手一投足を見張ることはありません。後見制度は廃止すべきです。

・　健康状態が悪いから施設に入るべき人が何人かいるという考え方があります。お小遣いの管理もままならないからです。そして、実際の生活ではもっと多くのことが要求されます。彼らは私よりも多くの助けを必要としています。また、聞かれれば、彼らは外で暮らしたいと言います。でも、彼らがそうするには、もっと、もっと助けが必要なんです。

・　施設では何でも手に入るけれど、自由な世界ではもっと複雑だと言う人もいます。しかし、私はそれでも外に出たいのです。すべての費用を支払わなければならないので、より大変だと思います。孤独になるのも辛いでしょう。外の生活は手伝ってもらわないとやっていけません。

・　退所した人の様子を見て、話すことができれば、施設で暮らしている人のためになると思います。だれでも退所者に会えるようになるとうれしいです。

**入所中に脱施設の促進を訴えることについて：**

・　スタッフは、私たち（入居者）の思い通りにはいかないと言います。どうせ何も変わらないのだから、文句を言っても仕方がないです。もし何かが変わったとしたら、それは奇跡のようなものです。

・　団体や弁護士が入って法律的なアドバイスをするのは良いことですが、施設の許可が必要です。しかし、施設が彼らを受け入れるかどうかはわかりません。

**第IX章の「救済、賠償、補償」に関連して：**

・　現状では、私がそこ（施設）にいる限り、補償を求めるのはよくないです。それが明るみに出て、「誰がそんなばかな話をしたんだ」と言われることになるからです。施設に対する恐怖心があります。何を言っても、施設は間違っていても認めず、私たちが正しくても認めません。例えば、施設内では塀が修理されていません。施設の中では、私たちの部屋の壁がびしょ濡れになっています。施設側はそれを知っていながら、自分たちには関係ないと言って何もしないのです。

**注：この投稿で示された見解はS氏のものであり、S氏の協議プロセスへの参加を可能にしたヴァリディティ財団（Validity Foundation）の意見を必ずしも反映するものではありません。**

（翻訳：佐藤久夫、岡本明）